



京機会ニュース

No. 18 平成 18 年 (2006 年) 春号

朝永正三先生のノート

京都帝國大學は明治 30 (1897) 年に設置されたが、その年に開設されたのは、理工科大學機械工學科と土木工學科の 2 學科であった。朝永正三先生は、その機械工學科の初代の教授であり京都大学機械系工学教室の礎を築かれた先生である。

朝永正三先生は、長崎縣のご出身であり、弟さんに京都帝國大學文科大學教授で西洋哲学史の朝永三十郎先生、三十郎先生のご子息にはノーベル物理学賞を受けた朝永振一郎先生がいらした。

朝永正三先生は、明治政府の工部省が明治 10 (1877) 年に設置した工部大學校に学ばれた。工部大學校は、明治 19 (1886) 年に東京大學工芸學部と合併して帝國大學(後の東京帝國大學)の工科大學となった、ときの工学の最高学府であった。京都帝國大學土木工學科の教授であった田邊朔郎先生はその工部大學校を卒業された。朝永正三先生は、明治 21 (1888) 年に帝國大學をご卒業のち特許局審査官をお務めであったが、京都帝國大學設置の前年明治 29 (1896) 年に、京都帝國大學の教官予定者として、ドイツ・イギリスに派遣されることになった。

朝永正三先生は、ご帰朝の後、明治 31 (1898) 年に京都帝國大學理工科大學機械工學科の初代の教授に就任された。理工科大學・工科大學・工學部の機械工學科において機械工學第三・第一講座を担当され、おもに熱機關學の研究と教育に従事され、大正 15 (1926) 年に停年退官された。“京都大学機械系工学教室第二世紀記念誌”(p. 83)には、明治 33 (1900) 年の授業科目表があり、そこには「熱學、熱氣瓦斯及石油機關」、「實地演習」の擔當教官として先生のお名前が見える。同記念誌(pp. 127-132)には、平成 9 (1997) 年の創立百周年記念式典における河本實先生の特別講演の記録があるが、そこで朝永正三先生は“古武士然とした風格でございまして、...”と紹介されている。

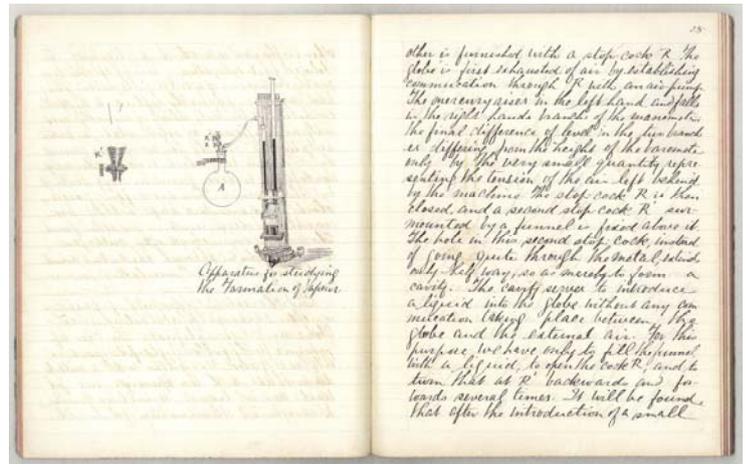
昭和 63 (1988) 年、朝永正三先生ご令孫の朝永峰子さまから機械系工学教室に対して、先生の工部大學校時代のご直筆の厚いノート 66 冊とノート 30 冊相当のメモのご寄贈があった。以来、機械系工学教室はその京都大学としての貴重資料を保管してきたが、将来の桂キャンパスへの移転・改組等にもなって資料が散逸することを案じた。ついで、平成 17 (2005) 年 12 月、この朝永正三先生の貴重資料を京都大学文書館に寄贈し永く管理いただくよう依頼した。



朝永正三先生お写真： 機械工學第一講座の流れを汲む菅原菅雄教授・佐藤俊教授・鈴木健二郎教授の担任の講座を経て、現在、牧野教授室に掲額されている。



厚いカバーのノート： ノートの表紙には“**The Imperial Collage of ENGINEERING**”，“校學大部工”とある。緑のノートの底部には“**NATURAL PHYLOSOPHY**”とある。



上掲の緑のノートから： 右頁には流れるようなペン書きの英文が、左の頁にはときに精緻な図がある。上図の説明には、*Apparatus for studying the Formation of Vapour* とある。ノートというよりむしろ書籍であると見える。

ところで、このような昔のはなし・言い伝えは、なかなか永くは伝わらないものである。京都帝國大學機械工學科の流れにある京都大学機械系工学会の諸兄には、上記の件、よろしくご伝承あるようお願いいたします。(機械理工学専攻 牧野俊郎 (S47))

— 京機会トピックス — 昨秋総会決定*

★ **学生さんも会員に一平成18年4月より**
従来の卒業生同窓会から学生会員も含むよりダイナミックな組織へ

★ **会員を広げます**
他教室、新旧職員も含めて機械に携わる京大人に広く門戸を開きました。

★ **新企画には特別会計の予算を付けます**
将来の収入増や会の活性化が期待できる企画には幹事会の承認を経て特別会計の予算を使用することが出来るようになりました。

★ **フェロー、永年会員制度を導入します**
永年会員制度については、4ページをご覧ください。

★ **京機会収支改善に向かう!**
「先輩と学生の交流会」に参加する企業からの協賛金により収支改善

京機会のメールアドレスとHPのURLが、3月より下記に変更になりました

E-mail: jimukyoku@keikikai.jp <http://www.keikikai.jp/>

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院工学研究科機械系工学専攻 TEL&FAX:075-753-5183

平成18年度京機会春季大会・総会開催のご案内

日 時：平成18年5月19日(金) 13:30～

会 場：住友電気工業(株)伊丹製作所 講堂(正門すぐ)

〒664-0016 伊丹市昆陽北1-1-1 TEL (072) 772-3300

- JR宝塚線「伊丹」駅より伊丹市営バス利用15分、
 - 阪急伊丹線「伊丹」駅より伊丹市営バス利用10分、
- 両駅共に、2番乗場から「昆陽里」行で「寺本公団前」下車、国道171号を陸橋で渡ってすぐが正門
4番乗場から「西野武庫川センター」または「JR中山寺」行で「伊丹病院住友前」下車、すぐ近くが東門
● タクシーの場合は、正門が便利です。



行 事：

1. 開会挨拶 13:30～13:35
2. 総 会 13:35～14:25
 - 1) 平成17年度活動報告 2) 会計報告・会計監査報告 3) 支部報告
 - 4) 役員改選等 5) 新年度運営方針 6) その他
3. 技術講演会・見学会 14:30～17:10

『自動車の安全技術の最新動向と住友電工の取り組み』 村瀬 亨氏(S51)
ぶつからない車をめざして、自動車の予防安全技術を展望する。

『切削加工の現状と将来』 佐橋 稔之氏(S59)
「より速く」「より美しく」削ること。工具の視点から、これから目指すものをご紹介します。

4. 工場見学 15:50～17:15
「超硬工具製造工場」「ブレーキ工場」

懇親会： 17:45～19:10

会 場：スワンホール

会 費：6,000円 学生 3,000円(当日会場でお支払い下さい)

● **ご自由な服装でお越しください。**

● **ご回答は、4月28日(金)迄に、同封はがきでお寄せ下さい。京機会HPからも、受付できます。**

平成18年度中部支部総会&新人歓迎会・懇親会のお知らせ

日 時：平成18年4月22日（土）

総会：15:30～18:00

新人歓迎会・懇親会：18:00～20:00

場 所：東邦ガス 栄ガスビル

名古屋市中区栄 3-15-33. 電話：052-242-7111

特別講演：

●総会

- 1) 支部長挨拶
- 2) 来賓挨拶
- 3) 平成17年度活動実績報告
- 4) 平成18年度活動計画

●特別講演1

『電力貯蔵用ナトリウム-硫黄電池の開発と実用化』

尾藤章博氏（1990年、京大工業化学専攻修了）日本ガイシ(株) N A S 事業部材料技術部電池材料G

●特別講演2

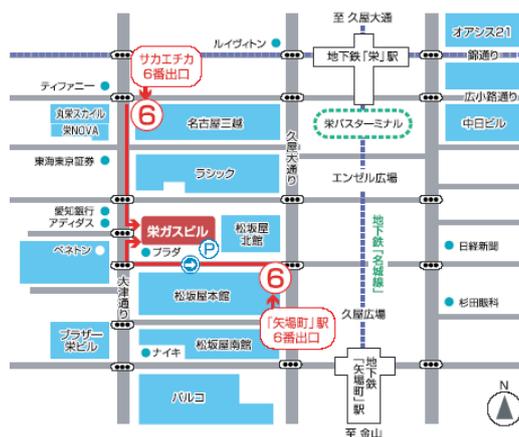
『最近の若者の視点からみた学生・大学・機械工学』小森雅晴先生（1995年、機械理工学専攻 助教授）
最近の学生の学業・就職・社会活動などに見られる傾向と、それに対応した機械工学系大学教育の取り組みを紹介する。

新人歓迎会&懇親会：今回から中部支部へ就職された新人の合同歓迎会を行います。中部地区に就職の方は、同期の人にも会えるチャンスですので、奮ってご参加下さい。

会費：7000円（但しH8年以降卒は4000円、新人は無料、学生2000円）

問い合わせ先：中部支部京機会事務局 丸山美枝

(株)デンソー生産技術部内 〒448-8661 刈谷市昭和町1-1 TEL:0566-25-7798 FAX:0566-25-4615



第二世紀事業会&COE共催 リカレント講演会

日 時：平成18年4月22日（土） 会 場：上記、中部支部総会と同会場

講 演：『最適設計の歴史とその基本的な考え方』西脇眞二（1986年、航空宇宙工学専攻 助教授）

本講演では、最適設計の歴史とその基本的な考え方を、寸法最適化、形状最適化、トポロジー最適化の分類にしたがって、平易に説明するとともに、それぞれの最適化の方法を機械製品の開発過程で有効に適用する手段について、簡単な例をまじえながら説明する。最後に、最適設計の方法を開発現場で利用可能とする市販ソフトウェアについても解説を加える。

●ご回答は、4月14日(金)迄に、同封はがきでお寄せ下さい。京機会HPからも受付できます。

21世紀COEプログラム第4回シンポジウムのお知らせ

日 時：平成18年5月13日（土） 13:00～17:30

場 所：京都大学桂キャンパス Bクラスター 桂ホール（京都市西京区京都大学桂）

13:00～13:05 開会の辞

13:05～14:05 特別講演「細胞のバイオメカニクスへの挑戦」東北大学教授 佐藤正明先生(S51博)

14:15～16:15 活動報告4件 16:30～17:30 桂キャンパス&桂インテックセンター 見学会

17:30～19:00 懇親会（桂キャンパス カフェ「アルテ」 会費3,000円）

●本シンポジウム・本研究教育拠点の詳しい紹介はHP (<http://cme.coe21.kyoto-u.ac.jp/>) をご覧下さい。

京機会クラブが誕生しました！！

便利の良い所で、フラッと立ち寄ればいつも誰か京機会メンバーがいて、話が出来るような常設の京機会クラブが欲しいとのご要望をかねてからお聞きいたしておりましたが、この度、JR 大阪駅内のホテルグランピア大阪19Fの3施設（「サンドバンク」、なにわ食彩「しずく」、パズレストラン「アズ」）が、京機会クラブとして利用できるようになりました。但し、ご利用には、メンバーカードが必要です。既に各種会合での配布も行っておりますが、希望者は宛名を書いた返信封筒（切手添付要）を同封の上、京機会事務局ご申込み下さい。◆京機会連絡先：2ページ参照

平成17年度秋季大会総会報告

日時：平成17年12月3日(土) 15:15～

会場：京大百周年時計台記念館

参加者：約300名

1. 講演会 『エンジンの研究・教育』

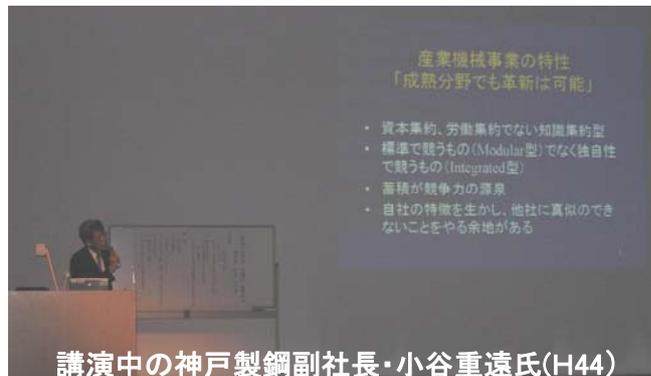
石山拓二氏(S53、京大 エネルギー科学研究科
エネルギー科学変換教授) 詳細は8ページ参照

2. 講演会

『戦略的商品開発と当社圧縮機事業における成功例』
小谷重遠氏(S44、(株)神戸製鋼所代表取締役副社長)

3. 総会

- 1) 会長挨拶
 - 2) 活動報告
 - 3) 会計報告・会計監査報告
 - 4) 支部報告
 - 5) 学生会報告
 - 6) 運営報告と審議
4. 懇親会：18:00～20:00 会場：京大吉田食堂



総会では、特別委員会からの答申が報告され、審議されました。

平成18年度秋季大会は、12月9日(土)開催予定です。

名簿発行年です！データの更新をお願いします

今年度は、3年毎の名簿発行の年となります。個人情報不正使用被害が頻発する中、皆さんもご自身の個人情報に関しましては常に注意を向けておられることと存じます。このような情勢の中での名簿発行につきましても、細心の注意を払いながら編集作業を進めております。まず、京機会会員の皆様には、名簿掲載情報の確認と共に、掲載してほしくない項目があればお知らせいただくようお願いしております。また古い名簿の処分に困るのでCD-ROMにして欲しいとのご要望もお聞きしますが、一方でデータが容易に流出し

てしまう危険性やパソコンをお持ちでない会員もまだおられる現状から、慎重に考えていきたいと思っております。

名簿の発行は今秋を予定しており、京機会会費を平成16年～18年分完納いただきました会員の皆様には無料でお送りすることとなっております。

なお、今回、同封いたしております名簿データの更新が最終更新となり、本年度発行最新名簿に反映されますので、データ内容等をよくご確認の上、変更がある場合は、京機会迄、8月末日迄にご連絡下さい。

会計関連のご報告とお願い

会計状況について

平成17年度は、特別委員会で検討された財政収支改善策の一部を実行するとともに、各位のご努力、ならびに第二世紀事業や21世紀COEによる実質的な補助もあって、単年度収支は一時的に好転する見込みです。今後は、会の活性化につながる新たな企画を実施に移しながら、健全な財政を確立する必要があります。皆様方のいっそうのご協力をお願いいたします。

会費納入のお願い

平成18年度の会費 3,000 円の納入をお願い致します。同窓会を維持し、また、京大の機械系教室の現役・OBが一体となって、日本を支えている製造業を推し進めてゆく活動は、会員の皆様から納入される会費を基盤にしております。これまでの報告にありますように、京機会の運営は経済的に楽な状況にはありません。製造業・機械産業が日本を支え、その中心が京都大学機械系であるための努力を継続してゆくため、是非、会費納入にご協力ください。

★永年会員登録のお勧め★

60歳以上の会員は、永年会費60,000円を納入することにより、その後の年会費はなく生涯京機会員サービスを受けられます。積極的にご登録下さい。(但し、登録に際し、既払込会費の返金はいたしません。)

寄付のお願い

ご承知の通り本会では寄付をお願いしております。前号以来、右記に記載いたしました方々からご寄付をいただいております。ご報告申し上げるとともに、厚く御礼申し上げます。引き続き、皆様方には、寄付へのご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

高額(10万円以上)ご寄付者

S34 川口 東白 様

平成17年度ご寄付者 (H17. 9. 16～H18. 2. 28)

S22 蔡 東華様、S23 江本隆一様、S24 田中繁男様
S25 松浦清一様、S33 池上 詢様、S33 二宮 敏様
S37 岩上稔史様、S38 中川 哲様、S39 垣野義昭様
S40 竹田 護様、S43 瀧本正民様、S43 竹/下正隆様
S44 浅野保夫様、S48 高橋義雄様、S50 盛林茂夫様
S52 藤山一成様、H3 田辺浩康様、H10 上野貴司様

会費ならびに寄付ともに添付の振り込み用紙をご利用ください。振込用紙は返信はがきと一体となって印刷されております。会費納入の際には、会費最新状況お知らせ欄に記載されている納入状況を今一度ご確認下さい。

本年度以前の会費が未納の場合には、ぜひ本年度分と併せて納入下さい。また、ご寄付をいただける場合や永年会員登録には、必ず金額等を所定欄にご記入いただきますようお願いいたします。

関西支部からのご報告とお知らせ

平成17年度下期活動報告(前号までの報告以降)

■産学懇話会

第21回：平成17年11月26日(土)(参加33名)

テーマ：日本のものづくりについて

講演：「科学の成果から製品が生まれるまで」

木村健二氏(京都大学、S51)

「日本と世界の工作機械産業の動向」

垣野義昭氏(垣野技術研究所、S39)

■異業種交流会

第21回：平成18年3月22日(金)

場所：三菱重工業(株)神戸造船所

■京機サロン(MOT研究会)

第17回 平成17年9月30日(金)(参加22名)

講演：「わざの伝え方」いまむかし

塩瀬隆之氏(京都大学、H8)

第18回 平成17年11月24日(金)(参加25名)

講演：「競争市場に於ける、生き残り戦略」

岩崎隆二氏(和晃技研、S45)

第19回 平成17年12月9日(金)(参加28名)

講演：「時代を乗り切る研究開発と知財戦略」

中西 清氏((株)コンポン研究所、S43)

第20回 平成18年2月23日(金)(参加18名)

講演：「ひがみやの国立大学独立法人化考」

松久 寛氏((京都大学、S45)

■京機九日会

平成17年10月11日(火)(参加28名)

「新入社員の教育を担当して思うこと」

中村陽一氏(S34)

平成18年2月9日(木)(参加23名)

「英会話が簡単に上達する方法」 村上則一氏(S35)

■京機・京都の会

平成17年12月3日(土)(参加10名)

「ISO9001、ISO14001について」 吉岡 肇氏(S37)

平成18年3月4日(土)

「ロボットと人間」 吉川恒夫氏(S39)

平成18年度支部総会・平成18年度新年会の報告

日時：平成18年1月13日(金)17:30～20:30

場所：ホテルグランヴィア大阪

■支部総会 (17:30～18:30)

平成17年度の活動報告：異業種交流会、産学懇話会、MOT研究会など支部各種活動の実績と、決算の報告をしたあと、引き続いて、平成18年度役員選出、平成18年度の活動計画の審議を行い、原案通り可決されました。支部長は留任、新事務局長には住友幸和氏(S61、川崎重工)、事務局次長には谷垣哲也氏(S56、島津製作所)が就任しました。また新副支部長として、岩崎正弘氏(S50、島津製作所)、山西健一郎氏(S50、三菱電機)が就任しました。

H18年度は「異業種交流会を始め諸活動の内容の充実、参加者層の拡大に努め、京機の中核支部にふさわしい、活気ある関西支部を目指す」という活動方針のもと、年2回の通常の異業種交流会に加え、学生会と協力して更にあと1回開催を計画し、また京機サロンはこれまでの会員の勉強の場提供だけでなく、会員

人材の活用など、より実践的活動の可能性についても検討してゆきます。

■平成18年度新年会 (18:30～20:30、出席者:112名)

当番会社：川崎重工業(株)

当番会社代表吉野氏(S42)の開会挨拶に続き、住友新事務局長の司会により、中谷支部長挨拶、来賓川口京機協会会長(S34)の祝辞、大学代表として久保教授の大学の近況紹介、そして参加者中最年長であられる三瀬氏(S16)の御発声による乾杯を行いました。宴たけなわには、新年会会場のグランヴィア大阪社長で支部京機サロン運営委員長でもある平田氏(S43)から京機サロンの活動紹介、学生代表による学生フォーミュラー「KART」の活動紹介、恒例の福引を行いました。

最後に、次期当番会社の島津製作所：岩崎氏(S50)の挨拶のあと、支部長以下、川辺、吉野、各務、塩路、山西、岩崎全副支部長が登場して万歳三唱を行い、盛り上がった新年会のお開きになりました。



参加者全員で肩組みして歌った逍遥の唄

平成18年度関西支部活動当面の予定ご紹介

■第22回 産学懇話会

日時：平成18年4月15日(土)13:30～

場所：京都大学 物理系校舎 216室

第21回 京機サロン(MOT研究会)

日時：平成18年4月21日(金)

場所：ガーデンシティークラブ大阪

以上 いずれもWEBおよびメールでご案内いたします。

京機九日会

日時：4月9日、6月9日、8月9日、10月10日 11:00～

場所：大阪中央電気倶楽部

■京機・京都の会

日時：7月1日、9月2日、12月2日(土) 11:00～

場所：ウエスティン都ホテル

九日会・京都の会とも登録制ですが京機会員であれば誰でも入会できます。多数のご参加を歓迎します。参加希望の方は京機本部事務局迄ご相談下さい。

関東支部からのご報告とお知らせ

第6回関東支部総会および平成18年度懇親会ご報告

平成18年3月25日(土)に神田学士会館で開催いたしました。当日の様子は次号にてご紹介いたします。

- I. 第6回総会(15時50分～18時) 学士会館202号室
- 挨拶 二宮敏支部長(バブコック日立(株))
 - 来賓挨拶 京機会本部・他支部代表
 - 事務局報告 黒岩一郎(住友重機械工業(株))
 - COE社会連携セミナー&SOE報告
 - 新支部長&新役員選出
 - 講演
(1)『機械系教室の現在とモノづくりのための機械工学についての私見』 京大 吉村允孝先生
(2)『粒子加速器技術の医療応用について』
住友重機械 中村吉伸氏

II. 懇親会(18時～20時) 学士会館201号室

同日、第10回リカレント講演会(講演:京大、池内健先生「関節と血管と機械工学」)も開催しました。

平成17年度活動報告 -幹事企業19社体制の発足-

関東支部は平成17年度から、従来の幹事企業11社に、新たに8社に参加頂き、19幹事企業の評議員で運営をスタートしております。

京都大学21世紀COE社会連携セミナー&関東支部SOE

平成17年にはCOE&SOEセミナーを計4回開講致しました。平成18年は、研究紹介に加え、広く社会を展望した産学共通の課題を議論する場として企画を進めて参ります。

平成17年秋以降のCOE&SOEセミナー実績は下記の通りです。

第9回 平成17年11月19日

『複雑系流体力学の産業への応用』に関する3講演

第10回 平成18年1月20日

「ゴンドラの減速装置の開発」

「新しい付加価値をもつ製品を生み出す為の最適設計」

「ユビキタス社会を実現するモバイル通信技術」

京機学生会との交流に関して

平成17年11月24日～25日、京機学生会SMILE企画の工場見学が関東支部OB企業4箇所で開催されました。11月24日には関東支部OBとの懇親会を横浜で開催し、OB13名と学生21名が世代を越えた交流と意見交換のひと時を持ちました。11月25日、平成17年度京機学生会キャリアカウンセリング企画を実施し、学生&OBで下記2つのテーマの討論を行いました。
①社会人として習得したい能力は?それはなぜ必要で、どう身に付けるか?
②社会人になって自分を変えたいこと、逆に社会人になっても変えたくないことは?

平成18年度関東支部役員

平成18年度の関東支部新役員は、本年3月25日開催の第6回関東支部総会で選出いたしました。

会計報告

第6回関東支部総会が終了後、平成17年度収支を確定して次号ニュースで報告の予定です。



京機学生会と関東支部OB懇親会(H17・11・24ウイング横浜)



第10回COE社会連携セミナー(H18・1・20神田学士会館)

中部支部からのご報告とお知らせ

平成17年度技術交流会&学生懇親会の報告

中部支部技術交流会ならびに学生懇親会を平成17年9月7日トヨタ自動車にて開催しました。堤工場にてプリウスの組立ライン、トヨタ会館にて自動車技術展示を見学し、その後、トヨタ水源クラブにて、「IMTSの取り組み」と題し、江崎正隆氏(S49、トヨタ自動車商品開発本部)にご講演いただきました。技術交流会終了後、学生との合同懇親会を行い、参加67名(うち学生28名)と大いににぎわいました。



学生の皆さんと、会社での生活ぶりや、技術屋の夢など意見を交わし、大変有意義な時間となりました。

平成18年度中部支部総会 &新人歓迎会・懇親会のお知らせ

- 日 時:平成18年4月22日(土)
- 場 所:東邦ガス 栄ガスビル

詳細は、3ページをご確認下さい。

当日は、13時からリカレント教育講座も開催します。

問い合わせ先:中部支部京機会事務局 丸山美枝
〒448-8661 刈谷市昭和町1-1
(株)デンソー生産技術部内

中国・四国支部からのご報告とお知らせ

役員連絡会、若手・ミドル会員の交流会開催

本年度より各地区毎(9月3日岡山、9月17日広島、10月8日四国(徳島) 総勢33名)に交流会を開催し、様々な話題に花が咲き会員間の交流を一層深める事が出来ました。また四国地区交流会では役員連絡会も同時に開催し総会開催要領を議論いたしました。



平成17年度支部総会の開催

平成18年2月4日JFEスチール(株)西日本製鉄所 福山地区にて理事会及び支部総会を開催いたしました。理事会参加者は12名、総会参加者は37名でした。

理事会及び総会にて17年度会計及び18年度役員の承認が行われ支部長には河田耕一(高知工科大学)が再任、事務局長には松川敏胤(JFEスチール)が選任されました。

支部総会と同時開催いたしました異業種交流会の後、JFEスチール福山地区の製鉄設備を見学し、福山ニューキャッスルホテルでの懇親会を開催しました。

翌日は有志にて、毎年男子プロツアーも開催されているJFE瀬戸内海ゴルフ倶楽部にてゴルフを楽しみながら更なる交流を深める事が出来ました。



今後の予定

平成18年度も岡山、広島、四国地区にて若手・ミドルの交流会を開催する予定です。時期は秋頃を予定しております。若手・ミドルのみならず多くのご参加を期待いたしております。

九州支部からのご報告

平成17年11月5日(土)、6日(日)に、京機会九州支部設立総会関連行事を開催しました。

第一部の「九州電力八丁原地熱発電所」見学会では、世界初の二相流体輸送ダブルフラッシュサイクルを適用した日本最大の地熱発電所の全体を、冷却塔や多数の地熱坑井全体を見渡せる展望台まで登って、折からの紅葉見物もあわせて見学させていただきました。

第二部の設立総会・懇親会は、南阿蘇久木野村の「三菱重工阿蘇高原クラブ」で開催しました。京機会5番目の支部として「九州支部」が誕生しました。本部の川口会長(S34)、関西支部の中谷支部長(S37)、関東支部の熊澤監事(S43)、中部支部の藤山副支部長(S52)が来賓として出席されました。中国・四国支部の河田支部長(S37)からはメッセージを頂戴いたしました。京都大学からは支部の前身である「九州の会」生みの親の松久先生(S45)をはじめ、久保先生(S41)、西脇先生(S61)が事務局の段様と一緒に出席されました。会員数166名の九州支部は、小さくこじんまりとしたところを生かして、大きな支部とは一味違う支部活動を目指していくことを確認しました。今回の阿蘇の温泉での一泊というスタイルをまねて、家族連れで、九州各地の温泉めぐりを計画すれば、他支部からの参加者も増えるのではな

いかとのご意見もありました。

翌日は「ゴルフ大会」と「観光」の予定でしたが、あいにくの大雨で「ゴルフ大会」は中止、「設立総会ゴルフ大会」の文字が刻まれた「優勝盾」は次回に持ち越しとなりました。(藤川 卓爾)



- 教室より - 平成17年度は、下記教員がご異動ならびに定年退職予定です。
長年お世話になりました。

池内 健教授(再生医科学研究所) : 本年3月31日 定年退職予定
山品 元教授(機械理工学専攻) : 本年3月31日 定年退職予定
朴 正圭助手(機械理工学専攻) : 本年2月28日 LG電子にご転出

エンジンの教育・研究 - どうするこれからの工学教育 -

エネルギー科学研究科 石山 拓二 (S53)

大学における工学教育の問題点として、大学の卒業・修了者の問題発見能力の欠如、専門知識の幅の狭さ、外国語能力の不足、などが指摘されてきたが、最近ではさらに、基礎学力の低下、日本語会話・文書作成能力の不足、ものづくりに対するセンスの欠如など、より根源的で由々しき傾向が目立つといわれる。そこでこの講演では、私が専門とするエンジンの研究と教育を通じて体験した具体的な事例をもって工学教育の問題点を把握し、その解決法について考えることにした。体験した事例（問題点）を以下に列挙する。

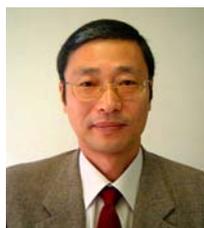


図1 ガスバッグ

1. 物の動く、働く仕組みに対する興味と理解が不足している？あるいは常識が失われたのか？

(1) スリングを選ぶ エンジンを実験室の試験台に据え付けるため、クレーンで吊り上げるときに使うスリング（ワイヤーの代わりに使う布帯）を学生さんに選んでもらった。彼は、天井にあるクレーンと床面との距離を測り、それを二倍して、10mの長さのスリングを注文しようとした。彼は、クレーンのフックが降りてくることを知らなかった。

(2) ガスバッグを使う 排気ガス中の成分を分析するため、ガスバッグ（図1）にガスを貯めておき、注射器で一定量を吸い取ってガスクロマトグラフに注入する。ガスバッグの購入回数が多くなったため、不思議に思っていたところ、本来、厚肉チューブの部分に注射針を突き立てるべきところ、学生さんは、風船の部分に針を刺していた。

2. 「教えてもらっていない」ことは分からなくていい？「指示されていない」ことはしなくてよい？

講義をしていて最近よく学生から聞く言葉は、「教えてもらっていない」である。本学では、何から何まで教えるような先生は少ない。特異なデータが含まれているのに確認試験をしない。あとわずかに実験条件の範囲を広げるとデータの傾向が読み取れる場合でも、指示された範囲を忠実に守って実験を行う。企業の現場でも最近目立つと聞く。

3. 高度化した技術をどう学ぶか、教えるか

進歩した計測技術のおかげで、生データだけでなく、それを解析した結果まで短時間で自動的に手に入る。ペンレコーダや電磁オシログラム上に描かれた波形を苦勞して読み取り数値化し、電卓で計算しながら解析した昔のやり方と違って、生産性は高いが、往々にして解析原理や意義が理解されていない。これは教える側の課題でもある。

4. 感動しない

苦勞して作り上げた新しい実験装置が初めて動いたとき、教員はまさに飛び上がりたいくらい嬉しい（図2の左にその状態を示す）。学生さんは、それがどうしたといった態である（図2の右）。この問題は非常に根が深い。大量の情報が手に入る環境、

教員の気持ち



学生さん



図2 先生だけが喜んでいる

ゲームに慣れ親しむことなどが、子供のころから、すべての事柄に筋書きが見えてしまう感覚を持たせたのか。感動を伴う達成感がなくなると、残るのは損得勘定だけになるだろう。理工系離れの傾向もこの事と無関係ではない。

こうした事例がすべての学生さんに当てはまるのではなく、また、教育のすべての問題を含んでいるわけでもない。しかし、私の短い教育経験の中でも、時間の経過とともに、こうした問題点はますます目立つようになってきた。改善のためのポイントはいくつかあると思うが、私が特に重要と考えているのは次の三点である。

1. 体験してもらうこと

物に触る体験が基本的に不足している。工業製品は、分解し、中身を見ることによって仕組みが分かる。自分が設計して作った品物がトラブルを起こしたり、壊れたりすると、もっと勉強になる。

2. 教えないこと

これは見解が分かれる点と思うが、私は、教え過ぎないことが大切と考えている。京大の良き学风は、自ら考える学生によって作られてきたと思う。問題は、どこまで教えるかであって、ここが教員の悩みどころである。

3. 自分も勉強

技術の進歩はますます速くなる。先に述べたような、進んだ技術をどう教えるかは、教える側の大きな課題である。高度な制御技術や材料技術が使えないがゆえに、巧妙な工夫が凝らされた古き良き技術を伝えてゆくことも大切である。また、製品作りに直接携わっていない我々大学の教員が、基礎工学が何に役立つか、どう使われるのかを教えられるかが鍵である。

これらを実践するのに講義・演習といったカリキュラムの工夫も必要だが、最も重要な教育の場はやはり研究室である。我々教員は、なによりもまず、忙しくて学生の面倒をろくに見れない現状を改善しなければならない。

ベンチャー立上げの裏話

並木 宏徳(S44)

現在、私は機械理工学専攻 井手重里教授(S52)および日本アジア投資(株)佐々木美樹専務(S48)と共にベンチャーを立上げるのが目的のベンチャー企業「テクノロジーシードインキュベーション(株)」略称TSIの社外取締役を務めています。監査役の三和研磨工業(株)竹ノ内壯太郎社長(S53)も合わせ四人の京機会会員が参加するこの会社は京機会と縁の深い会社であるだけでなく京機会があったからこのような会社が生まれたともいえると思いますので少し紹介をさせていただきます。

さて、TSIのHPを見ていただきますと次のように紹介されています。(http://www.tsi-japan.com/) テクノロジーシードインキュベーションは「産学連携で新技術をニュービジネスに」を合言葉に、京都大学・大阪大学・東京大学などのバイオ・先端材料・IT関連など様々な分野の教官を中心に設立されました。また、企業出身の第一線の技術者・エンジニアとも協力し、ニュービジネスを支援する体制もネットワーク化しております。さらに、これらの教官・エンジニアと連携した形で数十社の企業からサポートされております。TSIは単なる紹介に止まらず、研究者や教官とユーザー企業との間に立ち、事業化が円滑に進むよう資金援助を始めライセンス業務等多角的に支援体制を整え、推進する完全民営の会社です。

ここで述べられている事業内容の内、大学から企業へのライセンス業務を行う会社は国の施策として約7年前からTL0として全国展開されています。TL0 (= Technology Licensing Organization = 技術移転機関)は大学の特許などを民間にライセンス供与する大学等技術移転促進法に基づいて技術移転事業者として承認されている会社のことです。東大TL0をはじめ全国に41社(2005/09現在)ありますが、HPを見ますと貸借対照表は掲示していますが申し合わせたように損益計算書がありません。その代わりに技術移転収入を表示しており、例えば関西TL0(株)は広域TL0として京大とも縁が深いのですが、2004年度の収入が2,433万円で創立以来7営業年度の技術移転収入累計が僅か1億3782万円とずっと低空飛行を続けています。この会社は田中道七前立命館大学副総長(S30)が設立の時から役員をしておられるのでご存知の方も多いたと思います。国からの補助金などでかろうじて運営されている状態です。TSIが目指しているのはこうした単なるライセンス業務でないことをご理解いただけたらと思います。

さて大学発ベンチャーは1,000社を越え、その中には上場する会社も現れました。京大からは残念ながらまだ無いようですが、阪大からアンジェスMG、熊本大学からトランスジェニックが上場し、そのほか東大からエフェクター細胞研究所、オンコセラピー、メデイネットなども上場しています。これらの会社は高い技術力で事業拡大をしているという意味では一般の研究開発形企業と変わりなく、違う

のは大学の先生が経営に携わっているという事だけです。TSIが目指すビジネスモデルは、高い技術力を持った先生がベンチャービジネスを立上げる際の受け皿となること、資金を出すだけではなく手塩にかけて育てるということ、と考えてHPにあるように発足以来多くの大学・様々な分野の研究のお手伝いをしてきました。ところがお手伝いした研究が学術的な成果を挙げることはあっても、事業化できるようなビジネスモデルの構築は難しいのが現状です。

そんなところへ学研都市津田地区にあるイオン工学研究所を買収するという話が舞い込みました。従来の事業主体であったNEDOの事情もあって話はトントン拍子にすすみ、従業員がほとんどいないTSIが所員数十人を擁する研究所 (http://www.ion-eng.co.jp/) を運営することになってしまいました。大赤字の研究所でしたが所員の皆さんの努力とTSI社長と兼務の徃西社長の奮闘のお陰で来期には何とか収支が償うまでになりそうですし、この研究所を核とした新しい産学連携ビジネスモデルの展開が期待されています。

しかしTSIの財務的負担が増えたのは間違いありませんし、さらに佐々木取締役は全世界的な産学連携マーケットの開設や次世代ベンチャーファンドの運営といった気宇壮大な企画を次々に打ち出して会社経営の柱としようといろいろなプランを提案されています。そこで、今年3月に資本金を増やすことになりました。私や井手教授などもこれに応じる予定で、「上場してキャピタルゲインが得られたら京機会に寄付してベンチャー支援基金とする。京大機械にスタンフォードのようにベンチャービジネスを生み出す土壌をつくる」などと大風呂敷を広げていますが、自ら新しい産業を創る意思と能力のある人を発掘できなければ運営委員会メンバーでもある松久教授(S45)の口癖「ドブに捨てる」ことになるかもしれません。新しい芽が育ちますように京機会の皆様のご支援、とりわけ大学発ベンチャーを立上げようという熱意をお持ちの先生・院生の方々のご参加をお待ちしております。



TSI本社に集まった運営委員会のスタッフ。

左から3人目が徃西社長、その後左から松久教授、井手教授、佐々木・並木取締役、竹ノ内監査役 (何れも京機会会員)

「なる」と「する」

藤本 孝 (S39, 2005年3月退職)

むかし、伊谷純一郎(おサル学をのちにつくったひとたちの中心人物)が学生時代に宮地伝三郎という大先生の講義を聴いていた。ある日、宿題が出たので伊谷君、大いに張り切って力作を物して提出した。程なく「優」と朱書したのが返ってきた。伊谷君おおいに喜んで教授室に出かけ、「先生、ぼくのレポートどうでしたか」ときいた。伊谷君が期待していたのは、たとえば「ああ、きみが伊谷君か。覚えてるよ。レポートよく出来てたよ。きみはこういう風を書いていて、それはそれでいいんだけど、ここんところはこういう風に論点をちよつとずらして論を進めたらもっと面白くなったと思うけどね。」というようなことであつたに違いない。ところが「ぼくのレポートどうでしたか」という質問に対するその大先生の反応はちよつと違った。ぼつと赤くなってうつむいて小さな声で言ったという。「読んでません」

京都大学も時代のながれで教育にも力を入れるようになり、数年前(長尾総長の就任後)から毎年夏に(一夏抜けた)一泊二日の泊り込みの「教養教育に関する討論集会」(正式名称は毎回異なる)を持つようになった。一昨年(2004年)に淡路島で開かれた会では文学部の平田教授が「もしも真なるものが何も教えられないとすれば…」と題する講演をされた。中国の代表的なふたつの大学、北京大学と清華大学についてのお話であった。北京大学は日本でいえば東大とか京大に対応する大学だが、代表的な過去の学長はドイツに留学した哲学者であり、「自由」な学風を特徴とする。清華大学は元学長はアメリカに留学した電気工学者で、きっちりした教育で有名。たとえ話があり、それはそれぞれの大学の卒業生に「イスを作りなさい」と言うとする。清華大学の方はすぐに「はい」といって材料やノコヤカンナをそろえて一生懸命作ろうとするだろう。北京大学は「あなたが私にそれを指示する合理性は何だ？」ときいてくる、というものである。そんなことで、卒業生で企業の経営者など、世俗的に出世するのは圧倒的に清華大だという。ふたつの大学の学風に関してこんな詩をつくった人がある。「為中才立規則、為天才留空間」(横書きだと返り点の感じが出ないが、「中才のために規則を立て、天才のために空間を留む」と読む。)

40年近く前の大学紛争いらい、またはそれ以前から、京都大学の教育が「のどか」であったことは否めない。これは京大だけのことではなく、日本の大学はどこも似たりよったり、そのような教育を受けてきた官僚による文科省もそれを黙認しているフシがある。たとえば、誰か先生をつかまえて、「1単位とはどんなものですか」ときいたら、「さ〜っ」と言って「週1コマの講義が半期で2単位でしょう」という答えが普通である。「大学設置基準」に次の条文があるのはご存知ない。「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、…」知っている、それは実情を知らない文科省(文部省)の官僚が作ったばかばかしい規定だ、とたんに無視する。日本人の得意とするタテマエとホンネの乖離である。第2次大戦後、アメリカをモデルとして新制大学が出来た時にこの単位制の規定は作られたのであろうと想像される。この規定に従えば、2単位の授業とは90時間であり、1セメスター13週とすれば1回の授業について学

生の学修時間は7時間弱となる。1.5時間の講義に対して学生は5.5時間弱の自習をしなくてはならない。そうすると先生の負担もさることながら学生は1日に2コマ取るのがやっと、ということになる。すると週せいぜい10コマ、半期で20単位。もともと、語学などもあるので平均すれば単位数は若干上下する。卒業まで8セメスターだから160単位、ということで、卒業要件132単位は充分の余裕で満たされる。むしろ逆に、現行の卒業要件単位数はこのような計算の上に成り立ったもの、という方がより素直な解釈であろう。現役時代、わたしはこの規定にまじめに対決(たんに従う、というのではない)すべきである、という主張をしてきた。根拠はつぎのふたつ。

1. アメリカの一流大学では大学により若干は異なるが、大体においてこの基準にしたがった授業が行われている。アメリカの先生に1単位の定義をきいても答えの前半は日本と同じである。問い詰めると具体的にたとえば、「10週間のセメスターで週3コマ、各回宿題が…」という調子で答えてくれる。それから計算すると1割から3割ほどゆるいが、大体1単位45時間に近い。単位について成文化された規定があるのかどうかは知らないが、少なくとも末端の教師はそれを知らない。しかしながら「1単位とはこの程度」というのはひとつの常識としてあるよう。海外との交流が盛んなこの時代、京都大学が世界のなかで有数の大学のひとつとして地歩を確立するという目標は、「単位制」を採用している限り、その本場と似てあまりにも非なる現状(学生の学修時間にしてファクター5程度の単位安売りをしている)では、望むべくも無い。アメリカの大学は京大に学生(特に学部学生)を送らないであろう。
2. 大学が自己認識をする手段の重点が「自己点検評価」から「大学評価・学位授与機構」などによる「第三者評価」に移りつつある。もともと日本のcivilizationそのままでは「自己点検評価」が自己改革に結びつかないことはじつははじめからわかっていたことなのだが、この「第三者評価」の項目のひとつに「単位制」がある。この文脈からする単位制の基準は「大学設置基準」しかありえない。現実にはこの規定をどの程度厳密に適用してくるのかは不明な面もあるが、最終的には「1単位45時間」という基準で評価されるという線は動かないであろう。現状のファクター5の安売りを続ければ、たちまち評価結果にはね返る。世間の目は一次元的評価に敏感であり、京大が低い評価を受けつづけると、志願学生の質にまで響きかねない。

退職後、ある先生の学生にさせていただいて教育学部に入出入りするようになった。学部講義も聴かせていただいている。この先生の意図は『教育』をめぐる『ながれ』を歴史的に俯瞰(たとえば、「愛」の観念の変遷を紹介)することにより、学生は、自分が子供の時からまわり(社会)と学校教育により「作られた」のだということ、自分自身を検証の対象として客体化することによって自覚する。また、人間の「変容」はいかに生じ、したがって状況によっては人間がいかに容易に『操作』されてしまうのか、を実感する。それによって世間的、常識的に確立しているかに見える言説を批判的に把握しなおし、自分と社会についてより根本から思考する。」といったことであるように理解している。これは学生が将来知的な人間として生きるためには必要不可欠なことである。講義は一見とりとめのないお話しや、職人のしごとのビデオを見せたりして学生に

考えさせる、というスタイルでなされている。試験問題は「愛ある恋愛は可能か。愛ある教育は可能か。」というものであった。もちろん、前半はヒントに過ぎない。さて、上の「単位制」に戻れば、このような講義を「2単位90時間」、といった「規定」で測るのはいかにも興ざめ、という実感がある。

前回の講義では、「教育の定義」(ある人による)なるものを言われた。それは「できるようになるようにする」というものである。「できる」とは人間に備わった教育可能性のことである。「なる」とは人間が自発的に(自然に)変容・発達するというテーゼ、「する」とは誰かが作画的(人工的)に教え込むというテーゼであり、この定義ではその対立が表現されている。このふたつの原理は教育思想の歴史では振り子がふれるようにゆれ動いてきており、たとえば今の日本では「ゆとり教育」の重視など、「なる」の方向にふれている。この教育学的二律背反はいまだだれも解決しえていない。

さて、この枠組みで上に述べたことを理解するとどうなるであろうか。

まず、宮地先生は伊谷君が「なる」ようにしたのである。『「なる」ようにする』教育の成功例であろう。北京大学は学生は「なる」ものである、としているように見える。それに反し、清華大学は学生に教育を「する」という立場にある。「単位制」とは「する」の立場からする教育を露骨に表したものの

に他ならない、とも見える。

それでは日本の大学はどうすべきであろうか？ 簡単な解決などあり得べくもない。差し迫った問題として、「第三者評価」に対して「単位制」についていかに対処するか。おそらく他大学は遅かれ早かれ、大学設置基準にソコソコ従う方向に行くだろう。世間の目を気にしてのことである。もっとも、非常勤講師の存在で成り立っているような私学はそう簡単には踏み切れまい。オフィスアワーを、と言われても非常勤講師を簡単に呼びつけるわけにもゆくまい。

京大は？ 京大の伝統的な「自由の学風」は先ほどの例でいえば、「為天才留空間」に近いといえるだろう。伊谷の場合はまさにそうであった。しかし京大の学生の多くを占める「中才」に「空間を留め」ただけだとどんな悲惨なことになるか。それではどうするか。「規則」を立てるか。これについては現役の先生方がお考えになることであるが、私としては無批判、無媒介的に大学設置基準に従うことには反対である。まずは「対決」すべきである。自分たちがすべき教育の理念、理想をexplicitに表現し、その文脈の中で「単位制」を位置付けるべきである。そしてそれを乗り越える「理論武装」をしてほしい。そしてたんに基準に従う、ということではないより積極的な解決をしてほしい。これが私の希望である。

学生フォーミュラ第3回大会出場結果のご報告

機械系の学部生、大学院生を中心とした有志メンバーで結成されたKART (Kyoto Academic Racing Team) は、平成17年9月に富士スピードウェイ・モビリティにて開催された第3回全日本学生フォーミュラ大会(主催(社)自動車技術会)に参加し、総合12位(41校中)という成績を収めました。京機会の皆様方には、学生フォーミュラの活動へのご理解と共に多大なるご支援を賜りましたこと改めて御礼申し上げます。今大会は、チームとしては初出場となる平成16年8月の第2回大会(総合20位(28校中)、ルーキー賞3位)に引き続いての2回目の挑戦となり「2年目のジंकス」を打ち破るべく準備を進めてまいりました。

大会当日は、前回に引き続き台風の影響で競技日程が影響を受けるという波乱がありました。無事車検にパスし、すべての競技を完走することができました。詳しくは別途皆様にお届けしております京機短信の中でご報告していますので、そちらをご覧くださいませようお願いします。

KARTは、2回の大会出場という経験を経てチームとしては確実に成長していると思います。今回からは学生会SMILEとの連携も始まり、さらに活動の幅が広がりました。これからは、フレームの等より詳細な強度解析、新材料の導入、エンジン吸気管の流れ解析、エンジンおよび冷却系の熱解析、運転席のマンマシンインタフェース、シフトチェンジのロボット化など、機械系の様々な分野の要素を積極的に取入れ、最終的に一つの車両としてまとめ上げる設計プロセスを学ぶと共に、自チームのマネジメントに加えて他チームとの交流、ゆくゆくは海外チームとの国際交流を目指すなど学生フォーミュラならではの活動の幅を更に広げ

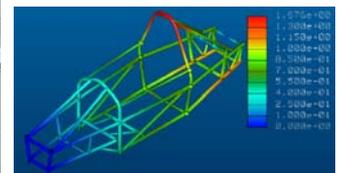
ていければと思っています。

KARTは、今年9月に静岡県袋井市の小笠山総合運動公園(エコパ)で開催予定の第4回大会にも出場すべく、現在鋭意準備を進めているところです。引き続き京機会の皆様方からのご支援をよろしく願いいたします。

KARTホームページ <http://www.formula-kart.org/>



大会会場にて



ユニークなアルミ製フレーム、FEMによるアルミ剛性の解析も行った。



力走するマシン

学生会 - 三年目の躍進 -

一昨年の夏に発足した京機学生会SMILE(以下、SMILE)も、はや三期目を終えようとしている。三期目の今年度は、SMILEの組織としての位置づけが大きく変わる節目の年となった。

これまでSMILEは京機会と密接な関係を持つ学生の任意団体であったが、今年度から、幹事会への正式な代表参加を認められる等、京機会における支部相当の一組織として認められるようになった。また、学生も正式の京機会会員と認められ、SMILEも京機会学生会員全体の集合としての組織に生まれ変わった。このような位置づけになることで、SMILEが独立して企画・実行をしやすい環境になった。しかし同時に、これまで以上に責任ある運営をしていくことが求められるようになったと受け止めている。現在は、組織体制を固めるための規約作りや会計制度の見直し等、よりしっかりとした組織になるに当たっての準備をすすめている。このようなSMILEを取り巻く環境の大きな変化が、今後のSMILE活動においても重要な契機になるものと考えている。

組織体制変化以外での今年度のSMILEの挑戦について報告する。

学生フォーミュラチームKART(以下、KART)という学生活動組織との連携企画である。KARTは、京都大学機械系の学生を中心とした活動組織であり学生フォーミュラに向けたカート作りから実際のレース参加まで、ものづくりプロセス全体を経験することを目的としている。構成メンバーが基本的に京都大学機械系の学生が中心であることに加え、京機会会員である多くの先輩に活動を支えられているという点でSMILEと非常に共通点の多い組織であった。ものづくりをKART、周辺の運営面をSMILE、そういう役割分担がこれまでの活動実績から展開できるのではないかとまず考えた。しかし、この役割分担はKARTにとっての本意からはそれたものとなり、また

対外的にもSMILEだけを窓口とすることがかえって誤解を大きくするという問題にいきついた。結局SMILEとしては同窓会ネットワークの有効活用に関するノウハウ共有というスタイルを選択した。

ここでの連携は最初に描いた餅絵とはだいぶ異なるものになったが、その中でSMILEが得たものとはとても大きいと考えている。別組織と連携する上で生じる問題として、相手の強みと自分たちの強みが何なのか、そしてそれらが相殺するものか相乗効果のあるものか、を体験的に学び取ることができたのである。この経験を生かし、様々に活動を展開していく一つの礎を得られたと考えている。

一方、未解決の課題が残る。現在、SMILEの規約制定に向けての作業で検討をしているが、発足当時から積年の課題である運営引継ぎが問題である。SMILEメンバーの中心は修士一回生の学生である。しかしそのため、毎年運営委員が入れ替わっていかざるを得ず、運営のノウハウが上手く継承できずにいる。しかしまだ適切な答えが得られたとは言えない。まだまだノウハウとまとめるほど成熟したものではないが、今後とも継続して京機会の企業会員の先輩、学内の先生方はじめ、SMILEを取り巻いてくださる多くの皆さんから、ご指導ご鞭撻いただきながらノウハウそのものを確立していきたいと考えている。



学生と先輩の交流会報告

2005年12月3日、機械系学生180名と企業95社の先輩方との交流がおこなわれた。京機学生会SMILEが交流会の運営を任されてから3年目、これまでに交流会を活性化に導いた貢献が評価され、今年度より京機会本体との共催形式に格上げされた。SMILEメンバーもより大きな期待と責任を自覚し、例年以上に身を引き締めて開催準備に臨んだ。

第三期を迎えるSMILEメンバーが掲げたこの一年間の目標は、「学生が実現したい将来像を見つけ、追い求められるような企画づくり」である。この大目標を実現すべく、工場見学企画やキャリア企画などさまざまな活動を実施してきたが、その集大成がSMILE企画の中でも最大規模であるこの交流会に結実する。今年度の新たな試みとしては、数名の先輩と10名程度の学生が円形に座って議論を交わす「パネルディスカッション」を加えた。壇上で先輩方と意見を交わした参加学生にとっては、「普段から物事を良く考えて生活すること」、そして「しっかり

と自身の将来像を見据えること」の重要性を再認識する機会となったようだ。

「自身のキャリアプランを多種多様な企業の人と交流することで具体化させてほしい」という、SMILEからのメッセージを参加学生が受け止め、とても有意義な時間を過ごしてくれた様子である。次年度の交流会も、より積極的に学生と先輩との距離を縮めるような企画とできるよう努める。ご期待ください。



先輩から学生の皆様へのメッセージ

戸谷昌弘氏の略歴：矢部研出身。1997年修士卒で、同年に住友電気工業(株)に入社。入社後一貫して警察庁の交通管制システムの設計・開発業務に従事。



学生の皆さん、こんにちは。もう早いもので、卒業してから約10年が経過しました。毎年リクルート活動で大学を訪問し、学生さんといろいろとお話をしますが、近年は年の差を感じることも多く、不本意ながら、自分がすっかり「おっさん」になりつつあるんだな、と実感する今日この頃です。

ここ10年来、企業でよく耳にするのは、最近の若者には元気/覇気がない、指示待ちが多く消極的、といったことで、これは私が入社してからずっと変わらないようです。「まあ、頭は良いんだろうけど・・・」という枕詞に続いて、というのが通例ですかね。かく言う私も、入社当初はきっとそんな風に評されていたのではないかと思いますので、あまり偉そうなことは言えませんが。

イチローや中田ヒデのように、クールに涼しい顔をして、やることはきっちりやる、きっとそんな姿の方がスマートだと思いますが、社会に出てビジネスをやる場合はっきり言ってあまり受けが良くありません。

「いつも明るい、元気が良くて前向き」といった、ある種の「分かりやすさ」を持っていた方が良いよう

な気がします。「ちょっと生意気やな、あいつ」って言われるくらいで丁度良いでしょう。

それから、当たり前のことですが、問題解決能力も大事ですね。もちろん技術的なことも重要ですが、一番大事なのは、「逃げないこと」だと思います。納期を前にして大幅に工程が遅延したり、製品出荷後にトラブルが発生したり・・・仕事をしていると、次々といろいろなことが起きます。困難に直面した際に、真剣に立ち向かって乗り越えられるかどうか、そこが勝負の分かれ道になります。

評論家タイプの人が結構多いんじゃないかと思いますが、皆さんには、当面プレイヤーとしての活躍が期待されていることを忘れないで下さい。周囲の人は、その人の「姿勢」を良く見ているものです。殊更に、技術的に通用するかどうか、といったことを憂慮される学生さんも多いですが、心配御無用ですね。ポテンシャルの高い皆さんなら、私のように全くの畑違いであっても、十分やっていけると思います。時々耳にする言葉でいうと「skillよりwill」ですかね。

最後に、先輩にとって後輩が工場見学に来てくれるのは嬉しいもので、良い刺激になっています。もし、住友電工に少しでも興味を持たれた方がおられましたら、気軽に御連絡下さい。

酒井優士氏の略歴：北條研出身。2004年修士修了。日産自動車(株)実験部で車体耐久性能評価の技術開発に従事。



今回は、現在、日々研究に取り組んでいる学生の皆さんに、一言メッセージということですが、何を伝えるのが一番皆さんのためになるのかいろいろと考えました。そこで私が今思うことで、学生時代もっとこうあるべきだったのではないかということを書こうと思います。

はじめに皆さんに質問なのですが、会社(主に機械系)に就職して、どのような知識、力が要求されるのか考えたことはありますか？皆さんは京都大学に入っているいろいろな専門の講義を受けていると思うのですが、大学受験までの勉強に比べて難しくて悩んでいる人はいないでしょうか？あまり優秀でなかった私は、会社に入ってもこんなに難しい専門知識が要求されるのかとすごく悩んだ時期がありました。しかし、実際に会社に入ってみてこれだけはいえると思います。

『必須な知識はせいぜい高校レベルである』。わかっていたいただきたいのは、皆さんが京都大学で受けている講義は非常にハイレベルかつ専門性の高い学問であり、たとえその時は理解できなかつたとしても、皆さんが各々就職して高度な技術開発に携わっていく中で、一度耳にしていただけでも必ずや大きな助けとなります。実際に、私自身も振動工学やフーリエ変換など、学生時代はなかなか理解に苦しみ、本当にこの先、自分に必要な知識なのかと逃げ腰になっていましたが、今では業務上必須の知識となっているため、専門書片手に大学のころ受けた講義を思い出しながら(思い出すというほど当時は理解できていませんでし

たが・・・)毎日取り組んでいます。当時、完璧に理解はしていなかったものの、講義にでて板書はメモしていたため、意外と頭に残っており、理解の助けとなっています。もちろん、学生時代に理解できていることに越したことはありませんが、なかなか周囲の人についていけないからといって嘆く必要はないと思います。

では、会社にはいって何が一番求められるのか、それは自分で考え、問題を解決していく力です。決して難しい知識は必要ないのです。今、皆さんはそれぞれ研究を自分でストーリーを立てて進めていますか？教授から言われるままに手を動かしていただくになっていないでしょうか？私自身は、後者に近かったため、会社に入ってからかなり苦勞しています。だから今思うと、研究室に入ったとき自分でテーマを考え、自分でストーリー立てて取り組んでいれば、もっともっと力をつけることができたのではないかと。

現在学生である皆さんはなかなかピンとこないかもしれませんが、テーマなんかそう簡単にきめることができないでしょう。ですが、時間が有意義に使える学生時代にしかこの力を十分に培うことはできないのです。また、それができるすばらしい環境にいるのです。大学の講義も完璧でなくともそのための一助として理解できていれば十分だと思います。これから研究室に配属となる学生さんは、自分で一度研究テーマを考えてみる時間を作ってはどうでしょうか？すでにテーマを決めて取り組んでいる方は、卒業論文のストーリーを自分で一度考えて、そのためにやるべきことは何かを考えてみてはいかがでしょうか？

このメッセージによって皆さんの学生生活がより充実したものとなれば幸いです。

会員のページ

近未来フィロソフィ研究会の案内 (昭和37年入学又は41年卒業生対象)

日 時：平成18年11月25日(土)17時～

場 所：京都タワーホテル(京都駅北)

定年退職後の第2の人生について、社会・技術・生活等幅広く、和気藹々と語り合いたいと思っております。2年振りの開催です。今まで一度も出席されていない方もぜひご参加下さい。気楽な会です。

最終案内は8月頃送付する予定です。住所変更のある方は必ず京機会事務局へ届けて下さい。

(幹事 中嶋邦彦)

京機乙酉会卒業60周年記念例会報告

日 時：平成17年9月22日

場 所：ホテルグランヴィア京都内 料亭吉兆

出席者：8名(井手口、川崎、奥平、谷口、角田、

西八條、池上、伊東)

私共は第二次世界大戦敗戦直後の昭和20年9月22日に卒業致しました。この度、卒業式の当日に合せて、記念例会を開くことが出来て、誠に感慨無量でありました。出席者が8名と、やや淋しい感がありましたが、今回は特別に戦中、戦後の学内や学外の勤労働員の数々の思い出話に花が咲き、意義深い一時を歓談に過しました。

思いますに、当時の教室の先生方、関係者の方々の多大の御努力、御援助により、あの戦後の大混乱の中で、無事卒業出来ました事を深く感謝しております。(谷口記、P. 15の写真参照)

京機会22年会平成17年総会報告

京機22年会平成17年総会が、平成17年10月24日正午より京都新阪急ホテルにて開催され、盛会裏に終了した。出席者16名、夫人4名 京阪神が中心であるが、東京、名古屋、台湾からも出席され多数の参加をえた。恒例により出席者全員による近況報告その他のスピーチがあり、旧交を暖めた。春秋2回、大阪にて22年会を開いているが、2年に一度は京都で全国総会を開いています。平成19年は卒業60周年になるので特別企画を実施することとし、次回大阪の会で検討することとした。

次回、春秋の会は、平成18年3月27日正午より、大阪倶楽部にて

京機22年会誌「余滴」8号平成18年2月頃発刊予定

(岸本記、P. 15の写真参照)

平成17年「京機23年会」同窓会報告

日 時：平成17年11月11日(金)12時～15時

場 所：京都センチュリーホテル

出席者：15名(伊原千秋、江本隆一、遠藤浩司、岡崎外雄、尾谷博敏、京谷好泰、口野弘幸、高橋 徹、竹内壽彬、中塚琢三、西岡邦夫、藤井 稔、同夫人、岐美格、山田啓之助)

昨年は金閣寺に程近い“しょうざん”で行ったが、足の便を考え従来どおり京都センチュリーホテルで開催した。例年通りの近況報告は今回も健康話題が多いのは年齢から当然の事だが、特に伊原君が東洋医学にもとづく経絡治療の話し、岐美君の真っ

白いあごひげ談義や、奥様同伴だと帰りの心配をしなくても良いなど色々の話が出た。今回から奥様同伴可にしたので、藤井夫人が同席された。最近60才過ぎの熟年離婚が喧伝されているが、戦前の修身教育を受けて育った我々の世代には無縁の話で、夫唱婦随?の円満家庭にお互い安堵した。来年は奥様同伴がさらに増え、一層和やかさが増すことを期待している。

来年度は平成18年11月10日(金)に同じ場所で開催するので、予定お願いします。

(西岡邦夫記、P. 16の写真参照)

五十年会(S25)2005年 秋季例会報告

日 時：平成17年10月24日(月)

場 所：(社)大阪倶楽部 出席者：15名

木本幹事より音信のない方々の近況報告を受け、今回の卓話は無類の中国通である下間頼一君が4000年の歴史を持つ中国医学、漢方による自身の健康法「心の健康・体の健康」と題して若さと心身の健康を保つ秘訣について話され、普段 西洋医学に頼り勝ちな我々一同にとって大いに示唆を受け、目から鱗の落ちる思いをしました。次いで森川君より京機会の報告、出席者全員より近況報告を、そして次回は平成18年5月8日(月)大阪倶楽部にて春季例会を開催することを決め、散会しました。

(合田英之記、P. 16の写真参照)

海底会(昭和28年旧制卒)同窓会報告

日 時：2005年9月30日(金)12：10～15：10

場 所：大阪 日本料理 河九

出席者：12名

前回02年11月に教室の見学会と共に開催してから3年、京を離れて初めて大阪で開いた。駅前第3ビルの最上階から大阪の町並みを眺めながらの昼食会となった。前回からの間に亡くなられた伊達・弘中両氏に哀悼の黙祷をささげた後懇談に入った。各位から近況を発表した。大部分の人は現役を離れており、第二の仕事、健康、趣味、利殖など夫々の新しい生活をエンジョイしている姿が披露された。次回は二年後に京都で開催予定。

(乾記、P. 16の写真参照)

昭和30年卒業同窓会報告

この同窓会は2年に1回開催しているが、今年は卒業50周年で大学の各所を見学した。まず京都大学総合博物館では古都らしい考古学や動植物学などの展示があったが、機械の機構学模型も展示されていた。これはわれわれのころは製図教室にあった教材だと思い出し、もう博物館に入る年代物になったかと感慨が深かった。ついで情報学研究科熊本教授から現況のご説明と魚釣りの力学解析の講義を拝聴し昔の講義を思い出した。また3研究室を見学し実験内容を聞きすこし技術的な討論もできた。その後、新装なった時計台2階の部屋で熊本教授、京機会事務局の段さんにも加わっていただいて懇親会を開いた。同窓生は72歳を超えているが、まだまだ元気な人が多く楽しく歓談した。(幹事 大友満、石田周二、P. 16の写真参照)

泰山会(昭和31年卒)報告

平成17年度泰山会は1泊2日で10月6日～7日に16名の参加を得て奈良で開催。1日目は好天に恵まれ「興福寺」「東大寺」「三月堂」「二月堂」を見学、2日目はゴルフ組以外は「平城京跡」を見学した後「薬師寺」を拝観。見学先は世界遺産や国宝の密集地で、ガイドや寺僧の懇切な解説に日本の歴史の豊かさを再認識し、世の安寧を希求された御仏の心は動乱の絶えない現代にも生きていることを実感しました。1日目の見学を終えホテルで夕刻より恒例のミニ成果発表会を実施、今回は赤松氏が『大学での学究生活』について報告。卒業後の大学の変遷には一同感慨無量。その後の会食では尽きぬ話題で楽しい一夕を過ごしました。

(友田勇記、P. 16の写真参照)

京機32会同期会報告

日時：平成17年9月28・29日

場所：静岡県下田市

われわれ同期会は、従来から隔年で一泊旅行を行っており、今年は伊豆半島南端の下田に決定しました。当初は9月初めに予定しておりましたが、台風14号の影響が懸念され、延期した結果比較的天候にも恵まれ二日目の29日には約2時間を掛け、徒歩で下田市観光協会のボランティアガイドの先導で主要な史跡・旧跡を具に見学できました。

奥様方を含め参加者全員(28名)歓談に時を忘れ、旧交を温め、再会を期して、無事終了いたしました。写真は9月28日、下田東急ホテルの庭園にて。

(鳥海千尋記、P. 16の写真参照)

平成17年度京学会(S33)総会報告

日時：平成17年10月19・20日

場所：割烹たちばな(富士宮市) 参加者18名

古稀を迎えた会員の記念すべき総会に当り観光にも重点をおき、快晴の下 静岡に集合 貸切バスで駿府場巽櫓から興津坐漁荘まで6ヶ所を観光。

総会は旨い料理とともに、銘銘の近況報告。話題

は健康、趣味、学習、社会奉仕、社会経済問題等多岐に及ぶ。不参加者の近況では体調重不良者も数人いる。時間の経つのも忘れるなか1次会終了。別室で2次会が懇談 囲碁組と賑やかに続く。まるで製図室にいる気分との声もある。富士山の両裾野迄見える部屋で朝食の後、来年の元気な再会を約し散会。

(中村弥寿家記、P. 16の写真参照)

1960年(昭和35年)卒同期会報告

1985年に全体同期会を家族同伴で倉敷で開催し、以降2～4年毎に開催地を関西、関東、中部の順に一泊二日で行っている。

今回は、世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」の吉野山にて、2005年10月28・29日に行った。

同伴の5名を含め、21人が28日は、快晴のもとと思いに万葉の面影を残す自然・遺蹟・旧跡を楽しんだ後、夜の食事や二次会を1782年創業の純和風旅館で飲み、食べ、歌い、ほら貝の吹き比べをして和やかに過ごした。

翌日は雨天の中、ほぼ全員が車5台で吉野山一帯をドライブしながら修験者、楠正成、義経他歴史に纏わる神社、仏閣や文化財を訪ね、次回は関東で再会を約束して散会した。(大岡記、P. 16の写真参照)

第1回「京機EK会」(遠藤研・駒井研同窓会)報告

平成17年11月13日(日)に、56名の参加を頂き、京大時計台100周年記念館の国際交流ホールⅢにて開催した。箕島先生の「大阪大学機械工学専攻の現状と教育」、駒井先生の「部下にやる気を出させるには」の2講演が行われ、その後パーティとなり、懐かしい話に皆様盛り上がりおられました。

京機EK会は今後研究室同窓生の持ち回りで開催することとなり、第2回京機EK会(時期、内容ともに未定)の幹事は高木氏(関西電力、平成4年卒)に決まりました。同窓生皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(幹事：田中和人)

(田中和人記、P. 16の写真参照)

投稿記事についてのお願い

原稿字数は、250字以内でお願いいたします。250字以上の場合、都合により事務局にて文章省略させていただきますことがあります。ご了承下さい。なお、お送りいただいた写真は返却いたしません。画像ファイルも可能です。次号(2006秋号 No19)の締切は、8月末日です。

また、本号より大幅な内容&紙面変更を実施いたしました。皆様のご意見を是非事務局までお聞かせ下さい。



京機乙酉会卒業60周年記念例会



京機22年会平成17年総会



平成17年「京機23年会」同窓会



京機32会同期会



五十年会(S25)2005年 秋季例会



平成17年度京機(S33)総会



海底会(昭和28年旧制卒)同窓会



1960年(昭和35年)卒同期会



昭和30年卒業同窓会



第1回「京機EK会」(遠藤研・駒井研同窓会)

編集担当：北條正樹、小森雅晴、平方寛之、伊藤靖仁、段 智子

2年間編集を担当させていただきました。この間のご指導・ご鞭撻有難うございました。

次号から松原教授が担当されます。(北條)



泰山会(昭和31年卒)